



拝啓、わたしへ

日向 理恵子

プロフィール

84年兵庫県生まれ、同在住。高校生時代に高木理恵子の名で『魔法の庭へ』を自費出版。デビュー作『雨ふる本屋』は増刷を重ねている。季節風同人。

れい子さんは、小説家です。書いているのは、童話にとぎ話。今日もパソコンにむかって、もうすぐしめ切りの、長いお話にとりこんでいました。

パチパチ、れい子さんは、パソコンのキーボードをたたきます。作家になることは、昔からの夢でした。小学校の卒業文集にも、「将来の夢は作家です」と、書きましたっけ。

(たしかに、夢はかなったけど……) れい子さんは、目の下にくまをつくって、パソコンをたたきつづけます。(なんだかなあ……)

れい子さんは、たしかに、売れっ子の作家になりましたが、おかげで年中、家にこもりっきり。髪はぼさぼさ、いつも寝不足の、ぼろぼろの顔です。おしゃれなんて、新人賞の授賞式で、似合わないドレスを着たっきり……恋人だって、いたことはありません。

(おっと、だめだめ、暗いことを考えてちゃ) 頭をふったついでに、壁の時計を見ました。時計の針が

さすのは、お昼前の、十一時。

「たいへん。洗濯物が、たまってる……」パソコンをそのままに、立ちあがると、くらくとめまいがしました。「栄養ドリンク、のまなくちゃ……」

知らずしらず、ため息がもれます。作家になって、物語をたくさん書くことが、小さいころからの夢。それがかなったのに、なんだか思っていたのと、ずいぶんちがいます。

ふらふらと冷蔵庫にむかっていると、庭の郵便受けからかたんと音がしました。れい子さんは、栄養ドリンクをあとまわしにして、外へ出て、ポストへむかいました。郵便受けには、いろんな郵便物にまじって、子どもの字で書かれた、一通の手紙が入っていました。

「ファンレターかな? でも、直接うちへくるなんて、へんなの」

けれど、手紙にはちゃんと、『中嶋れい子さま』と書かれています。頭をかきながら、れい子さんは手紙をもって、お日さまから逃げるように、家のなかへ入りました。